

Title	シャルトル学派とその周辺：十二世紀人文主義の一側面
Sub Title	On the Chartres Renaissance
Author	三上, 朝造(Mikami, Tomozo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1977
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.48, No.3 (1977. 10) ,p.81(307)- 105(331)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19771000-0081

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

シャルトル学派とその周辺

——十二世紀人文主義の一側面——

三 上 朝 造

緒 言

西欧の十二世紀は文化史的、精神史的観点から眺むるならば、頗る豊穰多様な時代であったと言えよう。中世史のより十全的な究明に蘊奥を傾けた碩学は、ヨーロッパ史の動的な展開に早く参画したこの世紀に「ルネサンス」⁽¹⁾「前ゴシック期」⁽²⁾「多面的文化形成の時代」⁽³⁾「精神的飛翔の時代」⁽⁴⁾「開かれた社会」⁽⁵⁾という呼称を添えている。その表現こそ異なれ、いずれもこの時代ならではの偏狭に墮することのない、柔軟な精神基調を含意している点では軌を一にしている。哲学、史学、文学研究が渾然一体を成してはじめて、古典期のギリシア文化にも比すべきこの時代が

総合的に把握しようという謂はそこに存する⁽⁶⁾。ところで、多彩な文化形成を特色とするこの時代にあつて特筆すべきは、並存する三つの精神的潮流が相互に拮抗しつつ、言わば遠心的な動きを示しているように思われることである。パリを牙城とする論理主義、シャルトルの園に憩う人文主義、シトー会およびサン・ヴィクトルの修道院に香気を放つ神秘思想がすなわちそれである。かかる三つの潮流のうち後二者は、その意図が相互に隔っていたにせよ、等しく論理至上主義の風潮に抗する姿勢を堅持したという点を特に考量するならば、十二世紀の精神は論理主義を軸にすな

わちパリを軸に波状を描いているとも考えられる。しかし来たるべき十三世紀を念頭におきつつ、十二世紀に固有の精神を探るならば、十三世紀に至るや時節外れになるであろう人文主義がそれに相応しき地歩を占めるのではあるまいか。就中十二世紀ルネサンスの眞の担い手とも評されるシャルトル学派の命運は、それをパリの論理主義に比して論ずる際、十二世紀精神史の焦点に据えられてしかるべき豊かな内容を具えている。論理主義的思考に照準を合わせるならば、十二世紀は黎明期であり、十三世紀のプレリュードになろう。しかし文芸研究の観点から眺むるならば、十二世紀は一つの時代の終焉を画している。かかる観点から本稿では、十二世紀をパリとシャルトルによって代表される論理と修辭の相剋の時代として捉え、このような軋轢を惹き起すに至らしめた歴史的背景ならびに文化的、精神的動向にも留意しつつ、相拮抗する精神の様相を探ってみたい。

さて生氣に充ち躍動してやまないこの世紀をルネサンスと銘打つからには、何はさておき人文主義あるいは教養主

義なるものに想いが到る。翻って考えてみるに、ルネサンスにせよ人文主義にせよ、その本質とするところは喩えようもない精神の昂揚であり、かつて成就せるものによせる憧憬の念である。そもそも人文主義とは教養主義とともに、論理的明晰さによってではなく、筆舌に尽くし難い含蓄によって、各人各様に思い描かれていた概念ではなかつたろうか。「論証は眞理を滅殺する」という古代の格言は、こと人文主義に関する限り正鵠を得ているように思われる。別言すれば、人文主義とは内容の一定した思想ではなく、思想や觀念の内奥にあってそれらを培う精神の根源的な在り方であると言えよう。すなわちそれは名状し難きエートスとして捉えられる。この意味で、J・ホイジンガが十二世紀人文主義の白眉と称されるソールズベリのヨハネスを、倫理的側面から把握する試みをなしていることはまことに示唆的である。「ヨハネスを理解すること、それは彼の教説と学識の背後に潜む情感 (Genüt) と心情 (Herz) とを見出すことにある」というホイジンガの言葉は、本稿のよき指針となる筈である。

シャルトルとパリーサザインの所説

従来シャルトル学派は、十二世紀人文主義の揺籃と看做され、その学风は十二世紀精神を端的に代弁するものとして、共感の念を懐かれることはあれ、絶えて異論をさしはさまれたためしはなかった。とは言えパリーの論理主義の攻勢の前に突如消滅したという点がやや感傷的に論ぜられ、いかなる背景の下にこの学派の人文主義的色彩が濃厚になったかについては、いささか不明瞭な部分が残されていた。⁽¹⁰⁾ それゆえ問われるべきは、シャルトルの人文主義を助長したのはいかなる動きであったのか、またそれは何故短命にして葬り去られねばならなかったのかということである。かかる疑問は何故シャルトルではなく、パリにおいて大学の成立をみたのかという問題意識にも少なからざる係わりを有する。⁽¹¹⁾ と言うのもシャルトルの衰微期とパリーの胎頭期とは相呼応しており、比類なき名声を博しつつ「諸学の父」(Parens Scientiarum)への道を着実に歩んでいったパリーの知的状況は、シャルトルの命運を窺い知る上で看

シャルトル学派とその周辺

過されざるものだからである。實際この時期のパリは「十二世紀のフィレンツェ」を名にし負うほどの知的盛況を誇っていた。⁽¹²⁾ 確かに外見上はそうであった。しかし殷賑をきわめたパリーの学芸研究は、その胎内に根絶し難き毒を孕んでいたということもまた同様に事実である。注視されるべきは外的盛況ではなく、健全さを欠く内実なのである。

十九世紀末以降R・プール⁽¹³⁾、A・クレルヴァル⁽¹⁴⁾によって描かれたシャルトル像は、さしたる修正も加えられずに支持されてきたが、一九七〇年に至りR・サザインによって異議が提出された。⁽¹⁵⁾ 第一に彼は、高度の専門教育が広く世に受容れられた十二世紀という時代を考慮するならば、古典研究を基礎とするシャルトルのベルナルドゥスの教育は旧態依然たるものであったと看做し、きわめて消極的な評価を下している。すなわちそのような教育は、時代の先端を行く論理学研究から滋養分を得、それによって知的渴望を癒した青年層を充足せしめなかったというのである。⁽¹⁶⁾ さらに彼は、シャルトルの人文主義はカロリング・ルネサンス以来命脈を保ってきた、古典の保存にのみ意を注ぐと

いう性格を具え、十二世紀という斬新な時代に対応するにはあまりにも革新性に乏しいものなるがゆえ、そこには固有の人文主義は認め難いとも述べている。⁽¹⁷⁾

では人文主義とは時代の視線を一身に集め、革新的性格を帯びたものでなければならぬのであろうか。そもそも人文主義の精神とは、むやみに時代に迎合しないものである。むしろ孤高の精神を保ち、時代への安易な迎合を極力抑止すべく警鐘を打鳴らすことこそ人文主義の真髓ではなからうか。時代に迎合するなら、もはや人文主義の内実は失われよう。古典文献学の泰斗E・K・ランドはソールズベリのヨハネス、エラスムス等を例に、人文主義者の人文主義者たる所以として「その共感は深く過去に根ざすにせよ、その活力はことごとく現実世界に注がれる」と指摘⁽¹⁸⁾し、醒めた眼で時代を凝視するのが人文主義者の存在意義であると述べている。まして十二世紀は相互関連を欠いた学芸研究、学問の場における実利主義的傾向が一世を風靡した時代である。シャルトルの人文主義はかかる趨勢に抗したという事実が、サザーンの説においては見過されてい

るように思われる。

さらに彼によれば、シャルトル学派の構成員として確認されるのはベルナルドゥスのみで、一般にその後継者と目されているギルベルトゥス・ポレタヌス、シャルトルのテイエリ、ギョーム・ド・コンシュはシャルトルで教鞭をとった形跡はなく、主たる活動の地はパリで学風もパリに接近していたがゆえ、彼らはパリ学派を代表したとされる。

その上サザーンは、右に挙げた人々の最も忠実な門下生とされているソールズベリのヨハネスも、シャルトルに足跡を留めていないことを明らかにしている。⁽¹⁹⁾とすると、十二年に及ぶフランス遊学時代の大半をパリで過ごしたヨハネスもまた、パリの陣営に組入れられねばならないのであろうか。サザーンの所説は厳密な写本研究に基づき、首肯せしめる点も少なからず見受けられる。だがあまりにも制度史的な見方を前面に押し出し、学派の構成を専ら地縁的な観点からとらえているがため、この学派の人的結びつき、目的志向性というより重視さるべき問題は完全に彼の視野から外れている。銘記すべきは、ベルナルドゥスを師と仰ぎ

つつ互いに理想を等しくし、強い精神的絆で結ばれた一つのグループが存在していたということである。かかるシャルトル学派の緊密な結びつきはヨハネスの『メタロギコン』に詳らかであり、夙にA・クレルヴァル、R・プールらによって強調されている。⁽²⁰⁾ともあれ制度史的観点に立つ限り、シャルトル学派の内実は能く捉えられない。人間の精神的営みに深く係わる大学の成立事情が、単なる制度史的見地をもってしては真に理解しえないのと事態は同じである。サザーンの見解は決して事の真相を明らかにするものではない。就中シャルトル学派の成員が、実利主義に走り、諸学芸の相互関連性を顧みることのないコルニフィキウスの徒、ソフィスト的弁証論者に向けた批判について彼は一言も触れていない。思うにサザーンの年来温めてきた十二世紀論がそれを許さなかったのであろう。すなわち彼によれば十二世紀は精神史上「修辭から論理へ」の転換期であったとされる。⁽²¹⁾かかる見解の下では人文主義などそのプログラムに編入されないのである。かくて十二世紀人文主義の揺籃たるシャルトル学派の存在は当然等閑にされる

のである。

またこのような見解は、彼の humanism 論にも影響を及ぼさずにはおかない。彼は他の論攷で、十三世紀および十四世紀初頭を humanism の開花期と看做し、⁽²²⁾ rational な精神活動を humanism の特質と考えている。すなわち十一世紀後半に至る迄人間精神は超自然的、秘蹟的要素の裡に幽閉され、そこでは人間理性の発動など望むべくもなく、ペシミスティックな世界観を抱かざるをえなかった。しかし十二世紀以降ことに十三、四世紀は精密さを旨とする学問の発展を契機に、人間は自らを取巻く世界を合理的に把握する展望を見出した。かくて人間の世界における自律的な存在が保証され、人間の尊厳、自然の秩序も認識されるに至る。彼はこれこそ中世人文主義の精華であり、しかも真に学問的な見方であると述べている。だがこのような彼の humanism 論がシャルトルの人文主義を保守的で時代遅れであると断じ、これに積極的な評価を下すことを躊躇させたように思われる。以上シャルトルとパリの関係、および人文主義の多義性の例証としてサザーンの説を

引き合いに出したわけであるが、彼の論は本稿の障害とはなりえても、決して新たな展望を約束するものではない。

コルニフィキウスの徒

周知のごとく、十二世紀は諸学芸の研究が隆盛に赴いた時代であるが、反面それらの相互関連を顧みず実利主義に偏する動きもまた顕在化している。十二世紀の人文主義を解く鍵は、まさにかかる事態の裡に潜んでいると思われる。十二世紀の中葉、パリの教師でアベラルドゥスの門下でもあったマイネリウスは「法学が文芸の学を窒息させる悲しむべき日が遠からず訪れるであろう」と予見したと伝えられる。が、法学に限らず専門学および実用学 (*scientia lucreativa*) 重視の風潮は甚だ根強いものがあった。しかも十二世紀にみる広範囲に及ぶ学芸研究の普及は、かかる趨勢に拍車を加えずにはおかなかつた。専門的知識を修めることが即利得を約束した当時において、学問的関心と栄達への思惑とは表裏一体を成していたと、クラッセンは述べている。⁽²⁴⁾ 時あたかも初期官僚制の萌芽期と重なっていた。

今や一方では「知識人の師」アリストテレスが新たな感興を喚び起こし、開設後時を経た医学校が盛況を示し、法学への関心がわかにか高まるといふ気運にあった。また他方では基礎学たる自由学芸の枠内においてすら論理学 (弁証論)、修辞学、文法学が各々自己の主導権を主張し、騷擾たるの觀を呈していた。

ところで十二世紀における教育に寄せる並々ならぬ熱意と関心は、学生数の飛躍的增加のみならず、教育理論および教育の実践に係わる深い洞察をも生ぜしめている。⁽²⁵⁾ E・K・ランドは四世紀、十五世紀、十九世紀とともに十二世紀を教育理論史上創造的な時代であると指摘している。⁽²⁶⁾ サン・ヴィクトルのフーゴの『ディダスカリコン』シャルトルのテイエリの『ヘプタテウコン』ソールズベリのヨハネスの『メタロギコン』等の十二世紀にみる学問論が単なる学芸の分類とその解説にとどまらず、広く学問と教育、延いてはそれらの文化全般との係わりにも着目し、それを批判的に吟味していることは、既述の精神風土に鑑み再評価されねばならない。⁽²⁷⁾ 換言すれば、十二世紀の人文主義は

大学の成立を促した諸要因との関連で論ずべき問題のように思われる。ハスキンズは大学の成立事情に触れ「大学は創られたものでなく、自ずと生成したものである⁽²⁸⁾」と核心を衝いた論を展開しているが、それは故なくして成ったものではなく、それを生ぜしめずにはおかないものがあつたことを、ここに改めて銘記すべきである。その成立に与つたのは決して古典をこよなく愛好する気風ではなく、専門の学、実用の学を志向する風潮であつた。わけても速成の技術主義的教育のみで事足りりとするコルニフィキウスの徒、さらに自らの携わる学を自己目的化し、実りなき討論に埋没するソフィスト的弁証論者の動きは無視し難い。と言うのも、彼らは文芸を基礎とする伝来の教育体系から離反して行く気運を、一際目立つ形で代表しているからである。まずコルニフィキウスの徒が十二世紀の精神界に如何に係わっていたかについて述べ、それを通じてシャルトル精神の一端を明らかにしてみたい。

シャルトルのベルナルドゥスの衣鉢を継いだ後継者達、また彼らと心情をともにする人々は各々学説に相異こそ認

められるものの、コルニフィキウスの徒に対する姿勢においては歩調を揃えていたと言える。⁽²⁹⁾ ヨハネスの『メタロギコン』はコルニフィキウスの徒の言動を、人文主義者ならではの辛辣な筆致を随所に混じえつつ報じている。彼の叙述は時として事実を脚色し客観性に欠ける憾みが残るとも言われるが、⁽³¹⁾ 勢いそれだけにその人文主義的理念は余すところなく宣明されているといえよう。クレルヴァルによれば、コルニフィキウスの徒の動きが表面化するのは一三〇年頃とされるが、⁽³²⁾ プロワのペトルスの証言から⁽³³⁾ も窺えるごとく、その後十二世紀末に到るまで勢力を保っていたという事実を顧慮するならば、事は頗る深刻であつたと察せられる。彼らが批判されるに至つた言動は要約すると次のようになる。彼らは生まれながらにして万事に精通し、己れを導く先達など要しないという自負心を露わにしつつ、即座に身を利する学芸にのみ心を奪われ、学びの姿勢など一向に意に介そうとしない。彼らが頻りに求めるものは論理⁽³⁴⁾、法学、医学、芸術である。なぜならこれらの学問は金銭づくの職を得さしめるからである。しかも彼らは学芸の研究

を信仰を妨げるものとしてではなく、時間の浪費であるとして斥け、己の知を誇りつつ真のフィロソフスたらんと欲するよりも、むしろフィロソフスらしく思われることで満足する⁽³⁵⁾。すなわち彼らは基礎学たる自由学芸はもとより学芸全体を等閑にし、教育基盤そのものを危胎に瀕せしめることにのみ熱心であったと断しても過言ではない。かかる彼らの態度は一頻りかなりの勢いを振っていたとみえ、当時未だフランスの文化的衛星国にすぎなかったイギリスの地においても、憂慮すべき問題と化していた⁽³⁶⁾。ヨハネスの記述によれば、彼らはシャルトルのベルナルドゥスの後を継いだギルベルトゥス・ポレタヌスによって「勞せずして誰もがなれ、しかも誰からも喜ばれるパン屋にでもなった方がましである。とりわけ技芸を磨くことよりもパンを得ることのみ汲々としている者は」⁽³⁷⁾と齒に衣着せざる痛罵を浴びせられている。ベルナルドゥスの学風を真率に受継ぎ、ヨハネスによって「ベルナルドゥス以来最も学識に富む文芸研究家」⁽³⁸⁾と讃えられたギョーム・ド・コンシュの語調はギルベルトゥスに劣らず手厳しい。彼によれば、コル

ニフィキウスの徒は短期間のしかも御座なりの勉学しか積んでいないにも拘わらず、自惚と饒舌だけは人一倍持合せあらゆる知識を所有していると思ひ込んでいる。しかし彼らはフィロソフィアをいささかも解することなく、その無知を己れのせいにすることを恥じてはいるものの何ら反省の色を示さず、益なきことをのみ説いていた⁽³⁹⁾。だがギョームですら「真のフィロソフスとなることよりも、フィロソフスらしく思われることで満足するかかる学芸の教師が、二、三年ですべての学問を授けうると公言した時、この無知蒙昧の徒の攻勢に翻弄され、教師の職を辞さざるをえなかった」⁽⁴⁰⁾という。爾来学芸の揺籃たる文法学には以前にも増して、時間も費されず関心もまた示されなかったとヨハネスは記している。事実「これらの人々（ギルベルトゥス・ポレタヌス、ギョーム・ド・コンシュ、シャルトルのティエリ、アベラルドゥス）すべてが彼らに抗しえなかった」⁽⁴²⁾と彼が述べているように、コルニフィキウスの徒の影響力は根強いものがあつた。

シャルトル学派の教養理想

かくの如き健全なる学の育成に留意せぬばかりか、阻害することにのみ貢献していたコルニフィキウスの徒に対し、ヨハネスはパリおよびシャルトル遊学時代の師の学的信念とともに、古典著作家をも援用しつつ自らの立場を披瀝している。⁽⁴³⁾ かのアベラルドゥスとは対蹠的に公的な場においては常に舞台裏に廻り、控え目な言動を示し続けた彼ではあったが、否それゆえにこそ、一見華やかさを誇る文化発展の背後に潜む、根絶し難き病根を目撃し看破しえたのである。周知のごとくヨハネスの『メタロギコン』はアベラルドゥスの『我が厄難の記』とともに、当時の知的風土を窺い知る上でのよすがとなるのみならず、シャルトル学派の基本的性格を把握するためにも不可欠の文献である。本書の主眼はアリストテレス「オルガノン」の解説に注がれてはいるものの、彼の本意は別の処にあった。すなわち彼自身明言しているように、コルニフィキウスの徒およびソフィスト的弁証論者の学に接する姿勢が本書の執筆

を促したのである。⁽⁴⁴⁾ 『メタロギコン』はロギカ (logica) 擁護の書であるが、彼においてロギカは狭義の論理学のみならず文法学、修辞学をも内に包み、論証と言語表現に係わる学として広義に解されている。⁽⁴⁵⁾ ヨハネスにとってロギカの研究は自然の内奥に潜む秘密を解き明かし、叡智と徳の修得に通ずる道を供するものであったが、それだけに留まらずマックガリーが言うように、社会の秩序を律し進歩を可能ならしむる不可欠の手段でもあった。⁽⁴⁶⁾

彼の基本姿勢は、次の言葉に集約されているように思われる。「私は意識してこの論攷に、倫理に係わる若干の考察を織り込んだ。と言うのも私は読み書きされるすべてのことは、それが人の生活態度に善き感化を及ぼさない限り、無益であると確信しているからである」⁽⁴⁷⁾ さらに「すべての哲学的見解は、それが徳の涵養と人の行動の指針たるべく稔りをもたらさなければ、益なきものにしてかつ擬物である」⁽⁴⁸⁾ かくて実践学としての倫理学は別の箇所ですべての学芸の中でも、際立って崇高な美を授けるのは倫理学であり、それはフィロソフィアの中では最も秀でた部門

を占め、それなくしてはフィロソフィスはその名に値しない⁽⁴⁹⁾とまで言われ、それを学ぶ意義が鋭意強調されている。ヨハネスにあっては基本的にすべての学芸が同等の地位に据えられ、それらの有機的関連が頻りに説かれていることを考量するならば、倫理学がこのように卓越した地歩を占めていることは何を意味するであろうか。この問いは、十二世紀に至り倫理学に対する関心が一般に高まり、それを自由学芸に編入しようとの試みがなされていることと無関係ではない⁽⁵⁰⁾。

倫理学への関心がとみに高まったことはすなわち、知と生の合一という古典的理想が改めて想起され、古典を公序良俗の確立のために活用すべきという認識が新たにされたことを物語っている。ところでH・リーベシュツ⁽⁵¹⁾、R・ボルガー⁽⁵²⁾によれば、ヨハネスは古典古代を全体的関連の下に捉えることなく、それを観念や形式の宝庫と看做し、彼の時代の思想と行動に能く合致すると思しきものを随時そこから抽出したとされる。またヨハネスの人文主義的理念にいたく共感し、それに自らの心情を吐露しているかにみ

えるホイジンガですら、ヨハネスが精神の自由の自覚を古代の権威に対し、純粹に適用していかないことに遺憾の意を表している⁽⁵³⁾。確かにヨハネスが古代の権威に服し、古典の受けとめ方についても批判的吟味に欠けていたことは否めないであろう。しかしクルツイウスが言うように⁽⁵⁴⁾、彼は古典主義を奉じたのではなく、十二世紀の人文主義という彼独自の世界に浸っていたとみる方が、彼をよりよく理解しうるのではあるまいか。因みにF・ヘール⁽⁵⁵⁾はヨハネスを念頭におきつつ、「イタリア・ルネサンス期の人文主義者にとって、古代は拘束を課す Religion となるのに反し、十二世紀における古代は自由な精神を育む Methode でありえた」と述べている。ヨハネスによれば、修辞学は人間の諸々の共同社会を調和、融合させるに与っている。神が人間の福利のために統合したものを分離しようと試みる者は公共の敵の名に値し、修辞理想を哲学的研究から締め出すことはあらゆる高度の精神的教養の破壊を意味する。かくて彼は理性 (ratio) と言葉 (oratio) とは一体を成して公序良俗を形づくるという、イソクラテスからキケロに至る

古典の教えを甦らせたのである。⁽⁵⁶⁾ かかる意味でヨハネスの『メタロギコン』は自由学芸擁護の書であると同時に、彼の社会観および人間観のアポロギアであったとするマックガリーの観方は当をえたものと言えよう。⁽⁵⁷⁾ すでに十一世紀以来、書簡と公文書作成のための範例を示すという行政的必要から考案されていた技法、いわゆる *ars dictaminis* が「キケロ抜きのリトリック」として、修辞学全体を書簡についての文体論に従属させていた⁽⁵⁸⁾ という事実を考慮するならば、ヨハネスの修辞理想は注目し値しよう。

言葉と理性との稔り豊かな結びつきは、ヨハネスが「自由学芸の最も熱心な研究者」⁽⁵⁹⁾ と讃えたシャルトルのティエリによっても、すでにより大きな展望の下に説かれていた。彼はアリストテレスの「オルガノン」受容に関する最初の証言でもある『ヘプタテウコン』において、当時すでに撰取されていた学知を余すところなく紹介し、自らその体系化を試みているが、彼の精神はその序論で遺憾なく發揮されている。「自由七科の提要はギリシャ人によってヘプタテウコンと命名されたが、ラテン人で初めてそれを編んだ

のはウァロである。次いでプリニウス、マルティアヌス・カペラによっても編まれた。彼らはそれを編むにあたり、素材を自らの作品から採っている。我々はと言えば自らの作品を用いずに、かつての秀れた碩学が諸学に関してしたためた著述を念入りに整理し、言わば三学と四科を結婚させ高貴なフィロソフスの家族を殖やすべく、一つの作品に仕立てあげた。ギリシャ、ラテンの詩人達は現にこう証している。フィロギアはアポロとミューズ達の力添えで婚礼の随員を残らず引率し、七つの自由学芸を仲人としていとも厳かにメルクリウスの許へ嫁いたが、さながらこの七つの自由学芸の存在なくしては何事もなされえないかのようだと。それもその筈である。哲学的思索を練るためには二つの手段を要する。すなわち知的理解とその表現である。ところで知性は四科によって輝きを増し、典雅にして華麗、しかも説得力ある表現は三学によって供せられる。それゆえ明らかにヘプタテウコンはあらゆるフィロソフィアにとり、唯一にして固有の手段と言えらる。さてフィロソフィアとは知慧への愛である。そして知慧とはあらゆる事象の真

理を総体的に理解することであり、知慧を愛する者のみがかかる理解に到達しうる。ゆえにフィロソフスのみが知慧を具えた賢者なのである。⁽⁶⁰⁾ ここにおいて七つの自由学芸は、知慧の殿堂を支える七つの柱として顕賞されている。

フィロソフィアとは七つの自由学芸の有機的綜合に他ならないとティエリは言う。それにも増して注目すべきは、人間性陶冶のための真の知は事象に係わる諸学芸と言語表現に係わる諸学芸の整然たる論述によって現出されるという構想である。⁽⁶¹⁾ すでに古代の賢者は世界の構造を説明し、その体系化を容易ならしむる優れた手段を提示している。教育の目指すべきは、諸学の適切な分類と事象の総体的な認識にある。古代人の規範に則りそれを摂取同化し、実生活においてもそれを活用すべく鋭意務めることが肝要なのである。ティエリの論はまさに文化そのものの問題に係わる。⁽⁶²⁾

古典的教養をつとに推奨するヨハネスの立場は、このよ
うなティエリの精神からも少なからざる影響を受けたと思
われるが、シャルトルのベルナルドゥスの存在があつてい
や増しに強められたに違いない。ヨハネスが伝えるところ

によれば、ベルナルドゥスは文芸研究を真の文化、教養の
礎と考へ、それを永い時間を費し余すところなく修めるこ
とを教育の主眼としていたことが窺われる。⁽⁶³⁾ たゆみなく人
類の教材たる古典に慣れ親しみ、それを日々に刻み絶え
ず反芻して精神の糧とすること、それは形式主義、技術主
義を排し、古典の味読を通じ稔りある自己省察によって達
成された教育であつたと言える。⁽⁶⁴⁾ 知識、真理は漸進的に獲
得されるものであるというヨハネスの信念は「過ぎゆく日
々はその前の日の弟子であつた⁽⁶⁵⁾」というベルナルドゥスの
教育方法への讃辞となつて表われている。この一見穏やか
な言葉の背後に、性急にしてしかも実利主義に傾いた当時
のパリの教育に対する抗議の声を聴き取ることも強ち無理
なことではなからう。叡智に至る六つの道を説いたベルナ
ルドゥスの韻文は、彼の面影を彷彿せしめ、簡潔ながらも
その精神を集約している。

Mens humilis, studium querendi, vita quieta,

Scrutium tacitum, paupertas, terra aliena,

Haec reserare solent multis obscura legendo⁽⁶⁶⁾

(謙虚な心、求めてやまない究明への熱意、静謐な生活、沈黙考の中での探究、清貧、異郷の地にあること、これらは、多くの者に不明瞭さを解き明かすものである) 実際ベルナルドゥスは「まことに、かくの如き平穩ならざる時代に、古典研究という静かな道を追ひ求め、巷の喧噪を避けた、このような教師として秀でた人物に出逢うことは救いともなる」⁽⁶⁷⁾ ような存在であった。因みに右に掲げた韻文は、凶らずもヨハネスとサン・ヴィクトルのフリーゴーにより、秀れた学究の例証として引用されている。このことは両者の関係を知る上で示唆的である。

ソールズベリのヨハネスと

サン・ヴィクトルのフリーゴー

諸学を批判的に吟味し、それを体系的に論述したのはサン・ヴィクトルのフリーゴーをもって嚆矢とするが、学術への導きの書であるのみならず叡智 (sapientia) へのいさなないの書でもある『デイダスカリコン』において、彼は次

シャルトル学派とその周辺

のように説いている。「……思うにこれらの学芸は無論密接に係わり合っているゆえ、相互に補完し合うことを要する。従ってその一つでも欠けるや、爾余の学芸だけでフィロソフスは養成し難い。それゆえ諸学のうちにかかる全体的結びつきを認めようとせず、それらの中からいずれかを自由に選び採り、爾余の学芸は等閑にして、そのみで完全な自己形成をなしうると考える人は誤っていると思われる」⁽⁶⁸⁾ また別の箇所では「すべての学芸を学べ。しかる後汝らはそれが余計なものでなかったことを知るであろう。学芸の幅を狭めることは好ましくない」⁽⁶⁹⁾ と語り、能うる限り幅広い知識の習得を力説している。周知のごとくフリーゴーは、あらゆる学芸を叡智に至る手段としてその重要性を強調し、これを神との交わりという無限の繋りへ秩序づけようとする広い視野と独自の見識の持主であった。右に記した彼の主張は、諸知の相互関連に意を介さない当時の学校および教師に対する警告とも受取られる。

ところでクルツィウスはフリーゴーを評し、彼はシャルトル精神の骨子を成した「文法学について述べる機会は甚だ

僅少で、文法の一部を成す詩が素通りされるのは注目に値する……彼の主要な関心は哲学、神秘思想、教義論に傾いている⁽⁷⁰⁾として、クレルヴォーのベルナルドゥス、さらに後世のスコラ学の徒と並べ、彼を反人文主義者と規定している。なるほど文芸に並々ならぬ関心が払われているヨハネスの『メタロギコン』に比し、フーゴの書はその趣をかなり異にしていよう⁽⁷¹⁾。しかし彼が学芸の有機的関連をきりに強調し、多角的関心を説いた点、また真の学芸研究の目的から逸脱したソフィスト的弁証論者に、仮借なき批判を浴びせている点などを考慮するならば、クルツイウスの見解は偏狭すぎると言えよう⁽⁷²⁾。G・パレ等はヨハネスとフーゴを鼓吹した精神には著しい懸隔が認められるとしながらも、両者をともに全体的智見を重視する十二世紀の人文主義を体現した人物と評している。またR・プーは、両者を結びつけた絆は知と生の合一という倫理的規範であったとの観方をして⁽⁷⁴⁾いるが、実際両者の距離は近迫していたと思われ⁽⁷⁵⁾る。

ソールズベリのヨハネスと

ソフィスト的弁証論者

先に十二世紀人文主義の特質を、コルニフィキウスの徒との係わりという側面から述べたが、ここでヨハネスとソフィスト的弁証論者との関係に焦点を置き、彼の人文主義的理念を論じてみたい。既述のごとく、すべての学芸は相互に密接な関連をもつゆえ、分断されてはならないというのがヨハネスの堅持した学問的態度であった。彼はこのような理由で、学芸研究に際しその有機的関連をつとに重視し、自ら実践したギルベルトゥス・ポレタヌスの姿勢を殊更高く評価している。「彼はひとたび事が要求すれば、すべての学芸を援用した。と言うのも、彼は全体は相互関連に基づいていることを、これらの個々の学芸を通じて知っていたがためである⁽⁷⁶⁾。」因みに、かかるヨハネスのギルベルトゥスへの共感の念とは逆に、十三世紀前半パリとオルレアンに象徴される論理学と文芸学との軋轢を諧謔的に詩った

北仏の吟遊詩人アンリ・ダンドゥリは、心情的にはシャルトル学派に接近していたが、ギルベルトゥスをパリの陣営に与させている。⁽⁷⁷⁾ところでヨハネスはギルベルトゥスを讃える反面、彼とは明らかに姿勢を異にするソフィスト的弁証論者に対しては、これを完膚なきまでに論難している。

彼らの言動には、コルニフィキウスの徒のそれと一致する点が少なからず見受けられる。両者に著しく共通する性格は、幅広い自由学芸の研鑽を怠り、速成の技術主義的教育のみで事足りりとする姿勢であり、そのことは取りも直さず、時間を要し入念に磨かるべき言葉の修練を省みないということに通ずる。だがコルニフィキウスの徒は専ら実利主義的動機から学芸の習得を最小限に留めようとし、ソフィスト的弁証論者は特定の学芸研究の行き過ぎから不毛の論争術に陥るといふ点で両極端の面もあった。ヨハネスの記述によれば、ソフィスト的弁証論者は爾余の学芸を等閑にし、論理学を自己目的化するに至っていた。彼らは事あるごとに論理一貫性をのみ標榜し、それを金科玉条としたがため、論理学はもはや知識を体系づけるための有意

義な手段たりえなくなつたのみならず、人間教育を無味乾燥な形式主義、技術主義のうちに閉じ込め、精神の硬直化を助長していた。まさに時代閉塞の状況であつた。⁽⁷⁸⁾「誰も⁽⁷⁹⁾が論理学の研究家であることを誇っている」風潮に対し、ヨハネスは各人の知識の幅に比例して論理学の有益度が増すことを繰返し説いている。にも拘わらず、彼はソフィスト的弁証論者の頑迷な態度の前に「論理学は真理を志向するために用立てられているのではなく、己の才幹を誇示せんがために利用されている」と慨嘆するの他はなく、「論理学はかくして劣悪なる人々の手に陥ちた⁽⁸⁰⁾」と末期的症状を訴えている。またギョーム・ド・コンシュも「アリステレスの名は彼の下僕に値しない人々によって辱しめを受けた⁽⁸¹⁾」と語り、論理学研究に対しよき理解を示している筈のプティ・ポンのアダムでさえ、自らの学識を吹聴せんとして学ぶ学生達を惹きつけるため、教えに際し故意に議論を煩瑣化せしめることに汲々としていたと、激しい非難を浴びせている。⁽⁸²⁾

ヨハネスは、論理学はそれ自体有益で必須の学ではある

が、他の学芸との関連を断つや忽ちにして益なきものに變ずると述べている。「もしそれだけで留まるならば、それは血の氣のない不毛なものになる。またそれが他の学芸によつて息吹を注がれなければ、フィロソフィアの実を結ぶべく精神を活気づけることはない。」⁽⁸³⁾一方『メタロギコン』の序論でヨハネスは自らを「アカデメイアの徒」と称している。「私はアカデメイアの徒であるから、フィロソフスにすらよくわからない事柄について、私の言っていることが真実であるなどは公言しない。そのような提議が正しかろうと誤つていようと、私は真実に思われることで満足する。」⁽⁸⁴⁾それを裏書きするかのように、彼の著作には「多分」(forte)という言葉がしばしば用いられている。⁽⁸⁵⁾右の言葉の背後には、概念規定をもつて学問の究極目的とする偏狭な精神を忌み嫌い、穩当な立場から思索の真義を護ろうとする彼の真摯な思想的態度が込められてはいないであろうか。C・ウェッブ⁽⁸⁶⁾はかかるヨハネスの姿勢のうちにその人文主義者たる証を看取っている。論理学は時代の籠児であると同時に、本来辿るべき道から逸脱した結果、嫌

悪の対象ともなつていたのである。

「論理学研究において秀でていたがため、彼のみが真にアリストテレスを理解したと思われていた」とヨハネスによつて記され、「言説清澄にしてかつ明晰」であつたアベラルドゥスもヨハネスに多大な影響を及ぼしていたと思われる。すでにヨハネスは『メタロギコン』で、アベラルドゥスもシャルトルの陣営に与し、コルニフィキウスの徒と果敢に闘つたことを明言している。⁽⁸⁸⁾が、それだけに留まらず、アベラルドゥスはソフィスト的弁証論者をも攻撃の対象となしている。彼は教化すべき立場にある筈の彼らが健全であるべき学の破壊にのみ心を砕いていると、その論理学研究の低劣かつ無益な様を切々と書き留めている。⁽⁸⁹⁾この点に注目したアベラルドゥス研究家J・サイクスは、しばしば過度に弁証論に拘泥したと評される彼が、論理学の使用を制限しているものとして示唆的であると述べている。⁽⁹⁰⁾またサン・ヴィクトルのフーゴーがソフィスト的弁証論者を批判している条に「多弁を弄する者 (augigeruli)」という言葉があり、これは暗にアベラルドゥスを指すという

解釈もあるが、ヨハネスおよびアベラルドゥスの記述に照らして考えるならば、この解釈には同調しえないものがある。⁽⁹¹⁾

ヨハネスは十二年に及ぶフランス遊学の後公職に就きパリを再訪しているが、旧態依然たるかつての同僚の有様を眼のあたりにして「彼らは節制を怠り、節度をわきまえぬという唯一つの点で変わっていた」⁽⁹²⁾といつもながらの辛辣さを露わにしている。真理を愛する者は議論を忌嫌うものであるという彼の信念は変わっていなかった。しかし「論理学も修辞学も文法学も、今やすべてが改悪された」⁽⁹³⁾のである。古典古代の教養人は無知とバーバリズムに加うるに、絶えず宗教との軋轢をも考慮せねばならなかったが、十二世紀人文主義の最大の敵は宗教的に偏狭な精神のみならず、身動きできぬほどに硬直した論理学研究と実利主義的関心という全くの新顔であった。⁽⁹⁴⁾

修辞から論理へ

ヨハネスの時代においてすでに、論理学は文芸の学を学

シャルトル学派とその周辺

校のカリキュラムから排せんとする勢いにあった。連綿と続いた教育体系に対する青年層の反抗 (Revolt der Jugend) がこれに拍車をかけていた。⁽⁹⁵⁾ 今や三学 (文法学、修辞学、論理学) の均衡に破綻が生じ、論理学を中心にまとめられた諸学芸 (artes) が古典の著作家 (auctores) を浸蝕し始める。⁽⁹⁶⁾ 古代の語源学 (etymologia) はアルテスを *altus* (狭苦しいの意) に関連付けている。アルテスはすべてを狭苦しい規則の中に閉じ込めるからである。⁽⁹⁷⁾ 十二世紀後半以降のアルテスは正にかかる意味合いを濃厚に帯び、かくて教育の場において文芸の占めるべき役割はいや増しに狭められてゆく。文芸の学は「論理学の侍女」の地位すらも与えられないことになるのである。コルニフィキウスの徒およびソフィスト的弁証論者のみが古典研究への志向を阻害するものではなかった。時代そのものが来たるべき世紀の大潮流へと吸引されてゆくのを傍観せざるをえなかったのである。人文主義的精神を培う文法学にしてすでに旧来の性格を改めることになる。クルツイウスによれば、⁽⁹⁸⁾ 古代末期の文法学者は諸規則の伝承のみに専心し、そ

これらの根拠づけをせずに済んだ。しかし十三世紀はこの根拠づけを要求する。また前者は古典著作家からの引用文を範例として示したが、後者の思弁的性格の強い文法学は、過去の権威に依存しない体系を目指し、結局この引用を控えたことが古典研究衰退の一因となったと思われる。古典研究は十三世紀においてもなお命脈を保っていた、と指摘する論者も⁽⁹⁹⁾少なくないが、ほぼ十三世紀までに文法学の性格は一変し、専ら論理学に服することになる。すなわち文法学は「思弁的文法学」(grammatica speculativa)となり、このような動きは古典著作家からの解放を意味し、文法学は古典の味読と言語表現に資するのではなく、哲学的、思弁的な学となったのである。⁽¹⁰⁰⁾

文芸と論理学について述べることは取りも直さず、十二世紀の精神と十三世紀の精神を比較対照することに他ならない。サザーンの説く「修辞から論理へ」の精神転換が十二世紀の沃野を舞台に着々と進行していたことは疑いえない事実である。かかる脈絡からして「スコラ学誕生の時代」を指してルネサンスと呼称することは、いささかパラドク

シカルに思われる⁽¹⁰¹⁾というパレの評言は、至極もったもなことに言わざるをえない。十二世紀初頭にゆくりなく胎動し始めた時代の波は、加速度的に進行するのである。十二世紀の中葉にあっては、古典研究の敵は専ら論理学に限られていた。ところが十三世紀に至るや、医学、法学、神学がこれに加わる。さらに十三世紀中葉以降、アリストテレスの哲学、自然学関係の著作は西欧にはほぼ全面的に紹介され、それら諸学に加わるに至る。かくて理性とともに感性と想像力をも育む精神風土から、理知主義を旨とする精神風土へと時代は決定的に廻ったのである。

結 語

抽象論理に埋没することよりも、諸知の有機的関連づけを試み、その成果を典雅に表現することに強い関心を抱いたシャルトル学派の真骨頂は、哲学と文芸とが渾然一体を成すところにあつたと言える。就中生と知の緊密な結びつきを重んじ、自己の思想を表現する上で示されたこと細やかな配慮は、この学派をして十二世紀ルネサンスの真の担

い手たらしめている。⁽¹⁰²⁾ そもそも馥郁たる表現に意を注ぐ気分こそ、人文主義の内実を型どる必須の条件ではなかったのか。⁽¹⁰³⁾

我々は何物にも偏よることのない多面的関心を、シャルトル学派の精神を真率に表明したソールズベリーのヨハネスのうちに見ることが出来る。彼は書簡、伝記、歴史叙述、韻文、哲学的省察等を通じ、人生および学問に言及し、博雅の士たるを身を以て示した。もとより彼のみではない。弁証論の急先鋒としてのみ扱われがちなアベラルドゥスにおいても、かかる性向を認めることが出来る。實際学問の抒情化に心を砕いた彼ら十二世紀人のうちには、未だ不動の体系に結晶せざる前ゴシック期の精神が受肉されてきた。かつて一史家は、十二世紀のラテン語は *green old age* の言語であると述べたが、⁽¹⁰⁴⁾ この妙なる言葉こそ、温故知新を旨とする十二世紀を象徴するに相応しく思われる。終始醒めた眼で迫り来る大きな時代転換を注視しつつ、自己とそれを取巻く世界を語るヨハネスの姿勢は、十二世紀人文主義の精華といえよう。

シャルトル学派とその周辺

註

- (1) C. Haskins, *The Renaissance of the Twelfth Century*, 1927; G. Paré, A. Brunet, R. Tremblay, *La Renaissance du XII^e siècle*, 1933 (以下 Paré の略記) M. de Gandillac, E. Jauneau (éd.) *Entretiens sur la Renaissance du 12^e siècle*, 1968.
- (2) J. Huizinga, *Johannes von Salisbury*, in *idem Geschichte und Kultur*, 1954, s. 186-212, 里見元一郎訳「前ゴシック精神の人—ソールズベリーのジョン」『文化史の課題』東海大学出版会、一九六五、一一八—一四九頁所収。
- (3) P. Lehmann, *Die Vielgestalt des Zwölften Jahrhunderts*, *Historische Zeitschrift* 178, 1951, s. 225-250.
- (4) J. de Ghellinck, *L'Essor de la littérature latine au XII^e siècle*, 2^e éd., 1954.
- (5) F. Heer, *The Medieval World, Europe 1100-1350*, translated by J. Sondheimer, 1961, p. 17 seq., *idem*, *Europäische Geistesgeschichte*, 2 Bde, 1970 Bd. 1, s. 64 seq.
- (6) 柏木英彦著『中世の春—十二世紀ルネサンス—』創文社、一九七六、各章参照。
- (7) c.f., D. Knowles, *The Humanism of the Twelfth Century*, in *idem The Historian and Character and Other Essays*, 1963, p. 16-20.

- (8) 鈴木成高著『世界と人間性』弘文堂、一九四七、五頁、
 (9) J. Huizinga, op. cit., s. 187.
- (10) P. Renucci, L'Aventure de l'humanisme européen
 au moyen-âge, IV^e-XIV^e siècle, 1953, p. 57 seq., 112,
 note 128.
- (11) c. f., P. Classen, Die hohen Schulen und Gesell-
 schaft in 12 Jahrhundert, in Archiv für Kulturge-
 schichte, Bd. 48, 1966, s. 155-180.
- (12) Paré, p. 34-38; C. Haskins, op. cit., p. 377 seq.
- (13) R. Poole, Illustrations of the History of Medieval
 Thought and Learning, 2 ed. revised 1920, reissued in
 1960, p. 59 seq. (first published in 1884), idem, The
 Masters of the Schools at Paris and Chartres in
 John of Salisbury's Time, in E. H. R., 35, 1920, p. 321-
 342.
- (14) A. Clerval, Les Écoles de Chartres au moyen âge
 du V^e au XVI^e siècle, 1895, Reprint 1965, 增訂のハヤシ
 ムル学派のころの歴史をとりぞろぞろ W. Wetherbee, Plato-
 nism and Poetry in the Twelfth Century: The Literary
 Influence of the School of Chartres, 1972 E. Jeuneau,
 Lectio Philosophorum: Recherches sur l'École de Char-
 tres, 1973 が参考になる。
- (15) R. Southern, Humanism and the School of Char-
 tres in idem, Medieval Humanism and Other Studies,
 1970, p. 61-85. なお、サザーンの所説については鈴木成高氏
 「シヤルトン・ハネサンス」早大大学院文学研究科紀要十九
 輯「一九七四」一一一一～一三八頁を詳しむ。
- (16) R. Southern, op. cit., p. 74-76.
- (17) ibid., p. 76-77.
- (18) E. K. Rand, Founders of the Middle Ages, 1928
 Reprint, 1957, p. 103.
- (19) R. Southern, ibid., p. 66-73; 79-83.
- (20) A. Clerval, op. cit., p. 158-179, R. Poole, op. cit.,
 p. 99 seq, 176 seq.
- (21) R. Southern, The Making of the Middle Ages, 1953
 p. 167 seq.
- (22) idem, "Medieval Humanism" in Medieval Hum-
 anism and Other Studies, p. 29-60.
- (23) H. Waddel, The Wandering Scholars, 1929, 7th
 ed., 1968, p. 144.
- (24) P. Classen, op. cit., s. 158 seq.
- (25) c. f., D. McGarry, Educational Theory in the Meta-
 logical of John of Salisbury, in Speculum, XXIII,
 1948, p. 659.
- (26) E. K. Rand, op. cit., p. 222.
- (27) c. f., Paré, p. 94-96.

- (28) C. Haskins, op. cit., p. 382, idem., *The Rise of Universities*, 1923, 13th Printing, 1972, p. 4.
- (29) Johannes Saresberiensis, *Metalogicon*, I, 5, Mig-
ne, P. L. 199, 832, (英語) D. McGarry, *The Metalog-
icon of John of Salisbury: A Twelfth Century Defen-
sion of the Verbal and Logical Arts of the Trivium*,
1955, Reprint 1971.)
- (30) ロルニフキウスとは、中世紀に広く流布した『ウァルキ
ウス伝』に登場する当の詩人の中傷者であるロルニフキウ
スと、クインティリアヌスによつて引用され、速成教育を説
き、Ad Herennium の著者とも看做されたロルニフキウス
との区別を著者の二人が考へられぬ。H. Taylor, *The Medi-
eval Mind*, 1911, 4th ed, 1966, vol. II, p. 159, note 1,
c. f., G. Misch, *Johan von Salisbury und das Problem
des mittelalterlichen Humanismus*, 1960, s. 297. また、
モンネスの言及については新近のロルニフキウスが誰を指して
いるのかは知らず。M. Grabmann, *Die Geschichte
der Scholastischen Methode*, 2Bde. 1911, Reprint, 1957
Bd II, s. 114, J. Sikes, *Peter Abailard*, 1932, Reprint
1965, p. 56. なお、その著者については、確認できぬ。
- (31) G. Misch, op. cit., s. 301.
- (32) A. Clerval, op. cit., p. 227.
- (33) Petrus Blesensis, *Epist. Migne*, P. L., 207, 312, cited
by H. Taylor, op. cit., vol. II, p. 160.
- (34) 論理学が重用された理由としてボルガーは、明晰な思考訓
練を積んだ人材を行政機構が要請したこと、さらに神学上の難
題を解明する上で不可欠の手段とされたことを挙げてゐる。
R. Bolgar, *The Classical Heritage and its Beneficia-
ries*, 1954, Reprint 1973, p. 133.
- (35) この点については彼の態度は、*Metalogicon*, Prologus, I,
1, 3, 4 に詳しい。c. f., G. Misch, op. cit., s. 291 seq., *Paré*,
p. 190-194.
- (36) *Metalogicon*, Prologus; c. f., D. McGarry, op. cit.,
p. 659.
- (37) *Metalogicon*, I, 5, 832A. B. モンネスがロルニフキウ
スの徒と断じた一語をキルケルトウスは、“Ennii” または
“Pacamii (Pacuvii)” と訂正してゐる。c. f., G. Misch,
op. cit., s. 296-297; M. Grabmann, op. cit., BdII, s. 421.
- (38) *Metalogicon*, I, 5, 832B, <grammaticus, post Ber-
rardum Carnotensem, opulentissimus>
- (39) G. Misch, op. cit., s. 299, R. Poole, op. cit., *Ap-
pendix*, p. 313.
- (40) *Metalogicon*, I, 24, 856A. B.
- (41) *ibid.*, I, 24, 856B.
- (42) *ibid.*, I, 5, 832B.
- (43) この点については、柏木英彦氏掲掲者「人文主義の理念—
ン

「ルズベリのヨハネス」九〇三頁参照

- (44) *Metalogicon*, III, Prologus, 889B.
- (45) *ibid.*, I. 10, 837-838.
- (46) D. McGarry, *op. cit.*, p. 669.
- (47) *Metalogicon*, Prologus, 825B, <De moribus vera nonnulla scienter inserui: ratus omnia quae leguntur aut scribuntur, inutilia esse, nisi quatenus afferunt aliquod administriculum vitae.>
- (48) *ibid.*, <Est enim qualibet professio philosophandi inutilis, et falsa, quae se ipsam in cultu virtutis, et vitae exhibitione non aperit.>
- (49) *ibid.*, I, 24, 854C, <Illa autem quae caeteris philosophiae partibus praeminet, ethicam dico, sine qua nec philosophi subsistit nomen collati decoris gratia omnes alias antecedit.> ヲヨリ言ハレトスル美 (decor) とは人格美を意味スル。 柏木英彦氏前掲書二八〜二九頁参照
- (50) *c. f.*, P. Delhaye, *L'enseignement de la philosophie morale au XII^e siècle*, dans *Medieval Studies*, XI, 1949, p. 77-99, D. Luscombe, *Peter Abelard's Ethics* (Oxford Medieval Text), 1971, xv-xxiii. 拙稿「ペタンヌ・トベリン」参照
- (51) H. Liebeschütz, *Medieval Humanism in the Life and Writings of John of Salisbury*, 1950, Reprint 1968, p. 94, *idem* *Das Zwölfte Jahrhundert und die Antike in Archiv für Kulturgeschichte*, XXXV, 1953, s. 261 seq.
- (52) R. Bolgar, *op. cit.*, p. 199-200.
- (53) J. Huizinga, *op. cit.*, S. 200-201. 邦訳一三三頁
- (54) E. Curtius, *Europäische Literatur und lateinisches Mittelalter*, 8 Aufl. 1973, s. 63 Anm. 1 榎大隆 邦本 中村誠『ヨーロッパ文学の歴史』みすめ書房 一九七一年八月 註三 c. f., C. Morris, *The Discovery of the Individual, 1050-1200*, 1972, p. 54.
- (55) F. Heer, *Aufgang Europas*, 1949, s. 301-302.
- (56) E. Curtius, *op. cit.*, s. 86-87 邦訳一〇六頁
- (57) D. McGarry, *op. cit.*, p. 664.
- (58) *ars dictaminis* ヲヨリテ C. Haskins, *op. cit.*, p. 139-146; E. Curtius, *op. cit.*, s. 85-86 邦訳一〇三〜一〇五頁 J. Murphy, *Rhetoric in the Middle Ages: A History of Rhetorical Theory from St. Augustine to the Renaissance*, 1974, p. 194-268.
- (59) *Metalogicon*, I. 5, 832B, <artium studiosissimus investigator>
- (60) 『ペタンナロン』序論のニキヌルヲ E. Jeuneau, *Le Prologus in Eptatheucon de Thierry de Chartres*, dans

Medieval Studies, XVI, 1954, p. 171-175. 後記 E. Jauneau, *Lectio Philosophorum: Recherches sur l'Ecole de Chartres*, 1973, p. 87-91 に再録。 此の註釋は A. Clerval, *op. cit.*, p. 221 に公認される。

(25) c.f., B. Widmer, *Thierry von Chartres: Ein Gelehrten Schicksal des 12. Jahrhunderts* in H. Z. 200, 1965, s. 577 seq. R. Klibansky, *The School of Chartres*, in M. Clagett, G. Post, R. Reynolds (ed.), *Twelfth Century Europe and the Foundations of Modern Society*, 1966, p. 5 seq.

(26) 思うに、文化とはそもそも土地から自然発生的に生ずるものではない。それは人為的に育成されたものであり、まづ地中海東部の原産地から複雑な移植の過程を経て各地に撒かれ、新しい土地で入念な栽培が施されて、漸次実が結ぶようになされたものである。このいわゆる学問の伝承 (*translatio studii*) は西欧精神史上重要な意義を有するが、それについては後日改めて論じてみたい。

(28) *Metalogicon*, I. 24, 854, 855, c.f., R. Poole, *op. cit.*, p. 101-105; A. Clerval, *op. cit.*, p. 225-227.

(29) 因みにボルガーによれば、ベルナルドゥスの古典の読みはヨハネスの伝える限り、字義通りの意味 (*littera*)、本質的ではあるが未だ表面的な意味 (*sensus*) を把握するに留まっており、より深遠な意味 (*sententia*) の域には達していないとい

シャルトル学派とその周辺

か。 R. Bolgar, *op. cit.*, p. 196.

(30) *Metalogicon*, I. 24. 854A, <erat enim apud eos praecedentis discipulus sequens dies.> c.f., J. Le Goff, *Les intellectuels au moyen âge*, 1957, p. 19.

(31) 上の譯文は Johannes Saresberiensis, *Policraticus*, VII. 13, Migne, P.L., 199, 666D, Hugo de St. Victore, *Didascalicon*, III. 13, P.L., 176, 773B に公認される。 c.f., P. Classen, *op. cit.*, s. 160 seq. C. Webb, *John of Salisbury*, 1932, Reprint, 1971, p. 54.

(32) R. Poole, *op. cit.*, p. 102.

(33) *Didascalicon*, III. 5, 769C, <Hae quidem ita sibi cohaerent, et alternis vicissim rationibus indigent, ut si una defuerit, ceterae philosophum facere non possint. Unde mihi errare videntur, qui non attendentes talem in artibus cohaerentiam quasdam sibi ex ipsis eligunt, et caeteris intactis, his se posse fieri perfectos putant.> (34) *ibid.*, VI, 3, 800D, <Omnia disce; videbis postea nihil esse superfluum. Coarctata scientia iucunda non est.> c.f., Paré, p. 172-173.

(35) E. Curtius, *op. cit.*, s. 473 邦訳七〇一〜七〇二頁

(36) フーゴの文芸の位置づけについては、柏木英彦氏前掲書「美と超越—サン・ヴィクトルのフーゴ—」の章、特に四七〜五六頁参照

- (72) 柏木英彦氏前掲書(五六頁)では、フーゴーを反人文主義者とみなすのは妥当でないと言われている。
- (73) Paré, p. 94-95, 170-174.
- (74) R. Poole, op. cit., p. 185. 柏木英彦氏「サン・ヴィクトルのフーゴーにおけるフィロソフィアの問題」慶大言語文化研究所紀要、第二号、一九七一、六一〜六二頁においても、ヨハネス、フーゴーに共通する精神として、そのことが指摘されている。
- (75) ヨハネスとフーゴーの関係は、十二世紀人文主義を論じて逸することのできない問題であるが、この点については『メタロギコン』と『ディダスカリコン』の比較検討により、後日詳論を試みたい。
- (76) Johannes Saresberiensis, *Historia Pontificalis*, C. 12 ed., R. Poole, 1927, p. 28 (cité par Paré, p. 173, note 1 et G. Misch, op. cit., s. 345-346), <Utebatur, prout res exigebat, omnium adminiculo disciplinarum, in singulis quippe sciens auxiliis mutuis universa constare.>
- (77) H. Waddel, op. cit., p. 135-136.
- (78) *Metalogicon*, II, 7, 864B. C., II, 10, 869A. B. ヴィヤント・シラスヴェイホーヴの正に群集の論理学研究に熱狂する彼らの有様が描かれている。
- (79) *ibid.*, III, Prologus, 857B, <Omnes enim se esse logicos gloriantur>
- (80) *ibid.*, II, 7, c. f., R. Poole, op. cit., p. 193.
- (81) R. Poole, p. 193.
- (82) *ibid.*
- (83) *Metalogicon*, II, 10, 869B, <si sola fuerit, jacet exsanguis et sterilis, nec ad fructum philosophiae fecundat animam, si aliunde non concipit.> ヨハネスの論理学(弁証論)にたいする見解については、柏木英彦氏前掲書十九〜二二頁、および同氏「ノールスベリのヨハネスにおける弁証論—*Metalogicon* II-IV—」中世思想研究十七、一九七五、四六〜五二頁参照
- (84) *ibid.*, Prologus, 825B, <Academicus; in his quae sunt dubitabilia Sapientii, non juro verum esse, quod loquor: sed seu verum, seu falsam sit, sola probabilitate contentus sum.>
- (85) J. Huijinga, op. cit., s. 200, Anm. 38 邦訳1四五頁、F. Heer, *The Medieval World*, p. 120.
- (86) C. Webb, op. cit., p. 51-52.
- (87) *Metalogicon*, I, 5, 832B.
- (88) *ibid.*
- (89) J. Sikes, op. cit., p. 54-56. この点については拙稿「ペトルス・アベラルドゥスの学芸観」史学四八卷二号八三〜八四頁参照
- (90) Sikes, op. cit., p. 57.

- (61) 柏木英彦氏前掲書五四～五六頁参照
- (62) *Metalogicon*, II, 10, 869B.
- (63) *ibid.*, I, 3, 829D, <Ecce nova fieband omnia, innovabantur grammatica, immutabatur dialectica, contemnebantur rhetorica.>
- (64) C. Haskins, *op. cit.*, p. 94, 98, 355-356.
- (65) G. Misch, *op. cit.*, s. 294 seq., F. Heer, *op. cit.*, p. 109, E. Curtius, *op. cit.*, s. 62-68 邦訳六九頁
- (66) C. Haskins, *op. cit.*, p. 98, 136.
- (67) E. Curtius, *op. cit.*, s. 47 邦訳五〇頁
- (68) *ibid.*, s. 66, Ann. 5 邦訳八二頁註79
- (69) e. g. E. K. Rand, *The Classics in the 13th Century*, in *Speculum* IV, 1929, p. 249-269.
- (70) R. Bolgar, *op. cit.*, p. 208 seq., E. Curtius, *op. cit.*, s. 66 邦訳七一頁 C. Haskins, *op. cit.*, p. 137.
- (71) *Paré*, p. 138.
- (72) A. Clerval, *op. cit.*, p. 232.
- (73) D. Knowles, *op. cit.*, p. 20.
- (74) W. Stubbs, *Seventeen Lectures on Medieval and Modern History*, 1900, p. 175, Cited by C. Haskins, *op. cit.*, p. 129.